

出版社

出版取次

書店

読者

ICタグなどによる出版界DX化のイメージ

■データに基づく部数決定

■柔軟な増刷などの対応

■在庫をリアルタイムで把握

■機敏な本の出荷

■棚卸し、防犯対策の負担軽減

■きめ細かな販売分析

よりよい読書生活へ

リーダーを使い、本につけられたICタグを読み取る書店員(東京都品川区の「有隣堂アトレ目黒店」で)＝松本祐典撮影



書店活性化へ向けた共同提言

書店を豊かな想像力や独創性を育む国力の源などと位置づけた。そのうえで、キャッシュレス負担軽減、ICタグによる書店のDX化、書店と図書館の連携、新規書店が出やすい環境整備、絵本専門士らの活用など5項目を提案した。

ICタグで売れ筋注文へ

書店活性化プランは、官民で取り組む課題の一つとしてキャッシュレス決済を挙げた。キャッシュレス決済の増加に伴い、手数料負担は小規模店舗の経営を圧迫している。プランでは、小規模書店で3%台とされる手数料が「1%台後半〜2%台半ば」に下がるよう支援する考えを示した。

クレジットカードの手数料はカード会社が個別に決めており、決済額が少ない小さい店は高くなる傾向がある。粗利益率が20%程度とされる書店には負担が大きい。政府はキャッシュレスの普及を進める一方、カード会社などに手数料率の開示を要請してきた。

情報開示が進み、電子マネーやバーコード決済など多様な決済手段の登場で、手数料を引き下げる動きは広がっている。三井住友カードは昨年11月、一定条件で中小企業は一律1.98%と、業界で最低水準に抑えた。

ただ、引き下げられた手数料の認知が不十分で、手数料が高いままの書店は少なくない。プランでは、業界団体などを通じて周知を図り、書店の手数料引き下げを後押しする。

(経済部 山岸肇)

書店の

政府活性化プラン

DX化後押し

■省庁横断

「私の地元、岐阜県ですけれども、書店はやはり減っているところが多く、現状に危機感を持っている」インターネット普及などによる活字離れで、書店が一店もない全国の「無書店自治体」は4分の1を超えている。武蔵経済産業相は10日の閣議後記者会見で、問題意識をにじませた。

経産省は昨年3月、大臣直属の「書店振興プロジェクトチーム」を設置。課題のまとめや各省庁との協議を重ねた。今回のプランは、文部科学省や文化庁、国土交通省など省庁横断型となったのが大きな特徴だ。

■返品率

具体的には、書店の経営効率化の支援を打ち出した。本につけるICタグの普及を進め、書店にリーダーなどを導入する際に補助金で支援する。書店は売れ残った新刊本や雑誌を、一定期間内は出版社に返品できるが、需要と供給の隔たりが目立つ。返品率は書籍が33.2%、雑誌が43.8%に上る。しおりやラベルシールの形で本につけるICタグは、電波で在庫管理ができる。書店は売れ筋の本を即時に把握して注文でき、出版社や出版取次は機敏な対応が取れると期待される。今年に入り、ICタグを使った書店のDX(デジタルトランスフォーメーション)化の動きは広がる。丸紅と講談社、小学館、集英社が出資する「Pubte X(パブテックス)」は1月、ICタグを使った出版社・書店向け商用サービスを開始した。タグを使う出版社は当初の4社から、商談を含め13社に拡大。導入店舗数も2025年度内に100店を見込む。

課題は1枚十数円とされるICタグの費用や、書店用のリーダーなどの機器、防犯ゲート設置に必要な初期費用の負担だ。書店の特性により数十万円から数百万円の投資が必要という。漫画など大部数のものからの普及を見据えている。返本の削減については、大日本印刷が、書店側から必要な作品や冊数を積み上げるシステム作りを進める。活性化プランでも、経産省を事務局として、書店出版取次、出版社が参加した削減のための研究会の開催が盛り込まれた。

■広範な連携

自治体や図書館、文学館など、より広範な形で連携を促したことも特徴だ。読書環境の整備のため、自治体や教育委員会、書店などが参加する協議会設置を推進。図書館と書店連携の障害となっているベストセラーの複数冊購入についても実態を調査する。絵本専門士をはじめ、読書に造詣が深い人材の活用も進める。書店が販路拡大するためのホームページ作成や読書イベントの開催などを支援することや、書店の改装の後押しなども想定されている。自治体の積極的な取り組みも求めた。

九州で20店以上の書店を運営する「ニューコ・ワン」(熊本市)の塩原礼貴社長(54)は、「厳しい状況の中、図書館との連携など、プランの施策は価値があると感じている」と語る。今回のプランに書店側の期待は大きい。専修大の植村八潮教授(出版学)は「経産省の取り組みなどを通じて書店側も自分から変わろうとする機運が出てきた。今後は様々な連携を進め、本を読む人を育てる街づくりと一緒に担ってほしい」と話している。